

Title	コラージュ作品から読み取れる「生」への願望 : 「死にたい」と訴える学生のケースから
Author(s)	竹渕, 香織
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 314-332
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4941
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

コラージュ作品から読み取れる「生」への願望

——「死にたい」と訴える学生のケースから——

竹 淵 香 織

1. はじめに

学生相談という臨床の場で、しばしば「生」と「死」が重要なテーマとして語られる。最近では、青年期の死生観や生や死と向き合う態度は、死が日常生活と遠く切り離され現実感が希薄になっている（伊藤、二〇〇七）、「リアルな死」を経験せず「バーチャルな死」に囲まれる（藤井、二〇〇三）、死生観尺度を用いた調査でも、これといった特徴がみられなかった（竹淵、二〇一一）という指摘があるように、身近なものではなくなっている傾向にあるが、このような一般的な学生の傾向に反して、学生相談で出会う学生にとって「死」は遠い存在のものではなく、むしろよく語られるテーマである。

学生が語る「死」には、大きく分けると、「自分とは何か」「どう生きていくべきか」という人生の課題に向き合うケース、「死にたい」「生きていても意味が無い」といった自己の存在やその意味を問うケース、さらには、文字通りの肉体的な「死」だけではなく、挫折や喪失体験を「死」としてなぞらえる「比喻としての死」を語るケースなどがある。

る。

本研究では、特に「死にたい」という気持ちを繰り返し訴えるものの、死についての洞察が深まらずにいたケースにカラージュ療法を導入したところ、カラージュ作品から「生」へのエネルギーが読み取れたケース、特に、そこから言葉でのカウンセリングのみではなかった気づきを得たケースについて取り上げ、「死」をカラージュ療法で扱うことの効果について検討を加えたい。

2. カラージュ療法と「死」のイメージ

カラージュ療法は、雑誌などから写真や絵などを切り抜き、台紙に貼って一つの作品を作るという、極めて簡単な方法で自己の内面を表現することができるアート療法である。描画に比べて作り手の抵抗が低く、短時間で作品を完成できることもあり、学生相談でも広く活用されている。比較的簡単に自己表現ができ、作品に現れる自己の内面を理解するだけでなく、作品を制作することを通して、自らが癒される効果がある。つまり、言葉にできない気持ちを表現したり、さらには無意識的な自己に気づくことができる他、作品を完成させることによる満足感、達成感を得られたり、ストレスの発散ができるなどの特徴がある。

本来、アート療法で「死」を扱うことは、その刺激の強さを鑑みて慎重に行うべきであるが、アート療法の中でも、カラージュ療法はアクティヴなアクトを引き起こさない安全なものであり、急性期の患者を除き幅広く適応が可能な方法である（杉浦、一九九四）。一般的な病院臨床での自殺願望や死の仄めかしは、生への絶望やうつ傾向が背後にあることが多いとされているが、時にそのアート作品には「死んでしまいたい心境」が表されることがあり、患者理解の一

助となっている（加藤、二〇一〇）。

学生相談室で行うカラージュ療法で「死」のイメージを扱うことについては、安全性の確保について慎重に検討した。対象者は「大学に通える」ほどの健康度を保持しており、うつのような背景を持たず、アイデンティティ確立の葛藤のプロセスで「死」を口にするケースにのみ限定し、実施した。

なお、本論文で紹介するカラージュ作品は、すべて制作者の許可を得て掲載しているが、事例の内容については、プライバシーの保護と個人の特定を避けるためにいくつかのケースを混合したものととして報告する。

3. 方法

カラージュボックス法（あらかじめカウンセラーが雑誌から写真や絵などの切り抜きを用意し、まとめて準備しておく方法）を採用し、A4サイズの画用紙に作品を作る。

カラージュの制作から、制作者による作品の説明、カウンセラーからの質問、作品のイメージの共有、カウンセラーからのフィードバックまでを五〇分という個別カウンセリングの枠の中で実施した。

4. 「死」のイメージをコラージュ作品に表した事例

(1) 事例1

「やる気が出ない」と授業の欠席が目立つ男子学生A。

初回来談時三年生。

コラージュの初回実施までのカウンセリングの回数一三回。

主訴…「死にたい気持ちになくならない。生きる価値が見出せない」

経緯…繰り返し「死にたい」と訴えるが、「なぜ死にたいのか」「どんな時に死にたいと思うのか」「死んだらどうなると思うか」などという問いには答えず、「もう死ぬしかない」「死んだほうがまし」と繰り返す。

大学生活では友人がおらず、ほとんど一人で過ごしている。やる気が起こらず、授業にも出づらくなっているが、なぜそうなっているのか分からないと語る。

言葉は達者で、自分の理想については饒舌に語るものの言葉だけが一人歩きをするようで、自己洞察や思索が深まらず、登校しづらいという状況も改善しないでいた。

そこで「死にたいという気持ちもあらわしてみよう」とカウンセラーから提案すると、最初から意欲的に作品を作った。



事例1 作品①

作品①

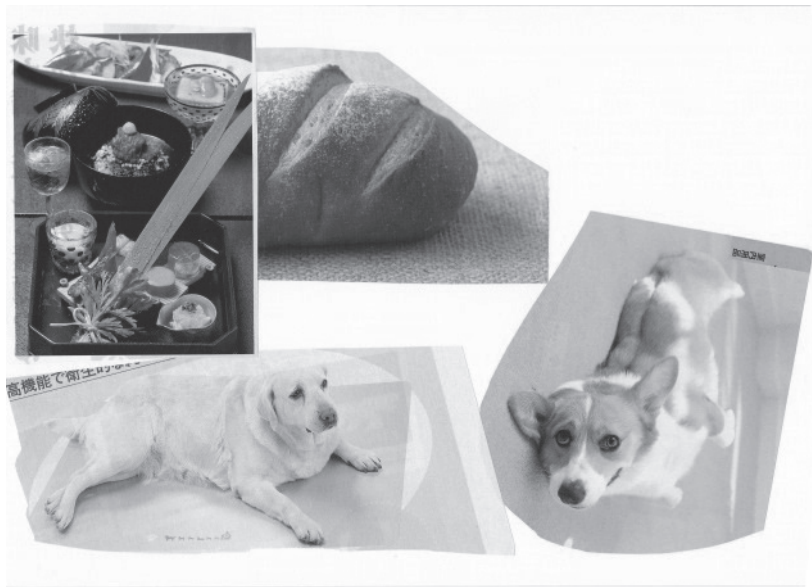
題名…日常の風景（制作後に本人が命名）

カラージュボックスの中から選んだ写真を切らずに貼る。

作品の説明…右上手前の男性が自分。人の写真二枚が「しつくりきた」。右の男女は楽しそうな家族。建物が気になる。

カウンセラーからのフィードバック…「死にたい」という気持ちを貼ろうということであったが、貼られた写真が「死」のイメージとはかけ離れた「人びと」「笑顔」であることを指摘する。また人の写真が、すべて同じ方向を向いていることに注目し、「自分と同じ方向を向いて、同じような気持ちを共有する人が欲しい」というようにも読み取れること、建物も「人びとが集まる場所」をあらわしているような印象を受けたことを伝える。

それに対してAは「死にたい気持ち」が作品に現れていない指摘に、「自分でも驚いた」「作品を作っている時は笑顔にばかり目がいった」と感想を述べた。



事例1 作品②

作品②

題名・犬

作品の説明…左の犬がお気に入り。パン、食事は楽しそう。右下の犬が自分。

ネットで首吊りの動画を見てしまい怖くなった。「死にたい」という気持ちとともに「死にたくない」という気持ちが出てきた。「死ぬのは馬鹿らしい」と思うが、辛いことがあるとすぐに死にたくなる。

カウンセラーからのフィードバック…今回は「首吊りの動画」を見たというきっかけで「死」というイメージが強く残る中での制作になったが、やはり作品は「動物」や、生きるためのエネルギーである「食べ物」だけが貼られていることに注目。自分である右下の犬の視線が「かまっしてほしい」「甘えたい」「助けて欲しい」というように見えたことを伝える。

カウンセラーの作品の印象を黙って聞いていたAは、「甘えたい、という犬の目の印象は、そのまま自分のことだと思った」「誰かに何かをして欲しいのかもしれない



事例1 作品③

い」と感想を述べる。

作品③

題名…働く人

作品の説明…右下犬、自分。働くことができるかなと心配。こつこつと働くことがいいのか、そうできるのか。

そして、前回の面談で「自分には、思い込みが強く、自己暗示的なところがあるかも」と気づいたことを話す。

カウンセラーからのフィードバック…三年から四年を迎える時期になり、左上と中央の丸の写真に現れているように「卒業」「就職」という現実的な課題に目が向くようになってきている。これまで「自分」と言っていた犬の視線の先には何もなかったが、今回は働く人に目を向けていることが印象的であることを説明する。

Aは「このままで卒業ができるのか、今のよう自分が果たして就職できるのか不安。でも、今まではそれを表に出さないようにしてきたのか、指摘されることにも

抵抗があった。犬の視線が働く人を見ているというカウンセラーの話に、ああ、そこを見れるようになったんだなと思つた」と語つた。

カウンセリングの展開

コラージュを作り、「死にたい気持ち」での制作がことごとく「生への希望」「仲間が欲しい」という願望を貼つていることに気づき、「自分は死にたいのではなく、不安な気持ちを死にたいという言葉にしていたのかもしれない」と話す。その後、カウンセリングで語る内容が、友人のいない自分、将来どんなことができるのかわからない自分であることから不安が生じる、などと具体的なものに変化した。

(2) 事例2

登校しづらい男子学生B。

初回来談時二年生。

コラージュの初回実施までのカウンセリングの回数四回。

主訴…父親を自死で亡くし、自らも「生きる意味がわからない。いつ死んでもいい」

経緯…知能が高く理論的な会話。父の死を哲学的に捉えて語つたり、また自らの命についてもどこか非現実的に語る。インターネット上で公開されている素人の書いた小説に傾倒したり、自分の頭の中にあるストーリーを熱く語るなど、非日常生活の中でほとんどの時間を過ごし、食事や入浴などの日常生活が困難になっている。大学に通う意味もわからず、人と会いたくなくとも訴える。コラージュの説明に、「こういうのは大好き」と積極的に作品を作り、カウ



事例2 作品①

ンセラーからのフィードバックにも「こういうことをわかってくれる人が今までいなかった」と好意的。

父の死が自らに大きな影響を与えていることを何となくは自覚しているものの、「すでに終わった」「死ぬことは簡単、生きている意味がないので、すぐに向こう側に行くことができる」「死んだ方が楽」などと語ったため、「死のイメージ」についてコラージュを作った。

作品①

題名…のんびり

作品の説明…大きな写真に目がいった。動物が貼られた。動物を生かす、食べ物。数珠は好きだから。右下の犬の横に貼ったのは、折りたたんだ食べ物。自分はいない。

カウンセラーからのフィードバック…死のイメージで作品を作ったが、動物が多く、明るい色の写真が多く、死の印象がない。動物たちも、仲間のように見える。左上のソファは「少し休みたいな」というイメージ。

Bは「確かに死つぽくない。でも死に対して怖いとか



事例2 作品②

暗い印象も持っていない。楽になるかもしれないと思うし」と語る。

作品②

題名…ダスト

作品の説明…テーマは終息。

集められたゴミに近い。溢れる食べ物、溢れてしまったもの。外から見ている自分。右上果物が好き。

カウンセラーからのフィードバック..もしかしたら、Bは中央のソファに座っていて、人々や食べ物を見ているのかも。でも、それがまだバラバラで、どんな人たちなのか、何が食べたいのかわかっていない印象、と伝える。ゴミ、という説明については、様々なことが自分の周囲にあり、自分で処理できない量になっているから、全てが無意味に思っている状態のような印象であると説明する。

「バラバラの食べ物は、確かにそう見えている感じ。自分がこんなに食べ物を貼ったことに驚いた」とB。それについてどう思うかとのカウンセラーからの問いに、



事例2 作品③

「いろいろなことが見えているのに、それがまとまっていないというのは、自分の今の生活全体に言えること。でも何だかいつも食べ物を探りたくなる」と説明した。

作品③

題名・翼

作品の説明…テーマは連鎖とか繋がり。左下の犬が好き、自分かも。やはり動物がたくさん貼りたかった。左上の人は、特に誰というわけではない。

カウンセラーからのフィードバック…作品の中に自分が出てきて、その後ろに「命たち」が繋がっているように思えた。それも、仲間がいる。

この作品を作ったあと、初めて父の死について具体的に話し出した。実は憧れと尊敬の存在だったという父について、それまでのどこか抽象的で哲学的な話ではなく、父が亡くなってからの時系列的な状況を説明、死を迎えた時の感情を話し、その後、自分が学校でうまく人と関われなくなった時期が、父の死とタイムミング的に合っていることに気づく。

カウンセリングの展開

自分の今の不適応の状態が、父の死と関連していると自覚し、カウンセリングで父の死に対する自らの気持ちを整理する作業を始めた。Bは、自分が作るファンタジーの中の死を「きれいな死」や「逃避としての死」のように語ることで父の死（現実）の辛さと向き合うことから逃げていたが、不適応状態と父の死との関係に気づいてからは、現実とファンタジーの「死」のイメージの分離状態が減少し、父の死と向き合うことができるようになったと考えられる。

(3) 事例3

「小さなことに落ち込み、すぐに死にたくなる」という女子学生C。

初回来談時三年。

コラージュの初回実施までのカウンセリングの回数七回。

主訴…小さいことですぐに落ち込み、すぐに「死にたい」「立ち上がれない」と訴える。細かいことも母親に助言を求めると依存が高いが、一方、支配されていると自覚もあり。心の問題については話したいという意欲があるが、「何と言ったらいいのか」「うまく言えない」と話すこともある。

「母が自分に求めているようにはできない駄目な自分が嫌」「いいことは何もない」「死にたい」と繰り返した時点でコラージュ実施。



事例3 作品①

作品①

題名…うつと光

作品の説明…好きなのは真ん中の花。何だか欲しいものがあるのにはつきりしない感じ。自分の状態をよく表している。犬は自分。いつも一人で誰かを求めている。泣いている自分と、寂しい背中という一人の自分。

カウンセラーからのフィードバック…貼られているものが全て生命を表しているもの。花は「成果や結果」「母から求められているもの」等の象徴に見えるが、それがぼやけていることで「やれていない」状態を表しているように思えると伝える。

Cは「今の死にたい気持ちを貼るつもりだったのに、目が行ったのが犬だった。でも貼り終わるまで、生物ばかりとは気づかなかった」「背中中は自分じゃなく、私を見てくれない母かもしれない」と分析。

作品②

題名…花

作品の説明…たくさん花が貼りたかった。女の子の表



事例3 作品②

情がいいが、本当はアジア人の写真があればよかった。橋はバージロード、スヌーピーは実家に飾ってあったことを思い出す。

カウンセラーからのフィードバック…ぐるつと周囲に貼られた花「求めていることがとても多く、またいろいろな種類がある母からの期待のように思える。二人の写真は、「二人が同じものを見ていることが印象的。実家の象徴のスヌーピー（過去）と将来成し遂げたいという成果（花）をつなぐ橋というように思える」と伝える。

Cは「作品①を貼ってみて、死にたい気持ちを表そうと思ったけど、犬と花の写真に惹かれたのが不思議だった」と前回を振り返ったうえで、「実家の母親から早く結婚して安心させて欲しいと言われる。でもうまくいかない。益々不安ばかり」「上司に誤解されバイトを辞めたが次が見つからない」と人間関係での不安を話す。

作品③

題名…トゲ

作品の説明…トゲを出したい。この絵の植物にはトゲ



事例3 作品③

がある。トゲが出たら自由になる。すつきりする。人を攻撃するのではなく、言いたいことが言えるように。考えながらトゲを出せるように一枚しか貼りたくなかった。一枚で充分自分の気持ちを表していると思った。いままで作った中で一番好きな作品。

カウンセラーからのフィードバック…母の期待に応えよう、成功せねばという「いい子」ではなく「自分の感情を出していいのだ」という前向きな気持ちが現れているような印象を受けた、と伝える。

Cは「人を怖がっている自分がいる。母の強い影響力、うまくいかない人間関係、傷ついてばかりいる自分が辛い」「人とうまく付き合えない時、母の言葉にNOと言えない時に死にたくなっていた自分に気づいた」と冷静に自分の気持ちを話した。

カウンセリングの展開

母から寄せられる期待の多さと大きさが、「普通のことではない」「できなくてあたりまえ」であること、小さいなことで起こる「死にたい気持ち」は、うまくで

きない時、母親からの期待に応えられない時、人間関係への不安からきているという気づきに。カウンセリングでは、「嫌なことはNOと言えるようになりたい」「自分と母の人生は違うものだと自分がきちんと納得して生きることができるようになりたい」と主訴を変更。

5. 結論

三つの事例は、いずれもカラーージュ制作時のテーマを「今の死にたい気持ち」「死のイメージ」と決めていたにもかかわらず、「動物」「植物」「仲間」「家族」「食べ物」などの「生」が表現された。さらにどの作品も色彩が豊かで、貼られている写真の枚数も多く、心的エネルギーを持つていることがうかがえた。

事例1では、人が集まる建物と複数の人びと、動物と食べ物、大学生活と職業生活を表す人を貼り、「仲間が欲しい」「大学を卒業して働くこと」という生きていく上でAが求めているものが貼られた。そこから、「死にたい」という言葉は、辛くなった際に逃げる言葉として暗示のように繰り返していたにすぎない、という気づきに繋がった。

事例2では、動物たち、食べ物、ソファ、化粧品などが貼られ、「疲れている自分」「エネルギーが欲しい自分」が表現された。さらに、それらがバラバラに配置されていることから「求めているものがあるけれど、それらに焦点があつていないこと」「現実的な問題を処理できるエネルギーがないこと」を視覚的に見ることで納得した。父の死を直視してこなかったことが、イメージ上の死に逃げることに繋がり、そこから生活への不応が生じていたことに気づいた。

事例3では、動物たち、花や木、子ども達などが貼られた。特に綺麗な花がたくさん並べて貼られていることから、

「母から期待されていることを成し遂げたい」「母の期待するいい子でいたい」という結果を求める気持ちが読み取れる。一生懸命努力してもうまくいかなかったり、母の言葉に一喜一憂してきたが、コラージュに貼られた花の数を見た時に「こんなに無理をしていたのか」と気づき、また、母とは違う「一緒の方向を見てくれる人」を求めている、そして、よい人間関係を持つためには「NOと言える人間になりたい」と将来への希望を口にするに至った。

このように「死」を語ることだけに終始してしまうケースにおいて、コラージュを作ること、さらに言うならば、そこに現れる「生」を自分で見ることで、自分の中に「生のエネルギーがあること」に気づくという効果が得られた。

6. 考察

三つの事例から、アイデンティティ確立のためのプロセスの中で発せられる「死にたい」という気持ちは、コラージュ作品には「生」として現れることが多いことがわかった。そして、その「生」のイメージから発せられるエネルギーは、作った学生本人も驚くほどのものであった。特に、自分の作品の中の①色の多さ、②人をはじめとする生物の多さ、③生きるエネルギー源である食べ物が多さ、に学生自身が目を見張るものであった。

学生が「死」を語る時、それは「死にたいくらい辛い状態」であり、「そんな自分をわかって欲しい」「うまく生きていきたい」と訴えている、と感じることが多い。「死にたい」という気持ちを丁寧に聞いていくと、「死にたいというより、現実から逃げたい」「ここから離れて楽になりたい」という気持ちがある、と説明するケースも少なくない。しかし、うまく課題に焦点を当てることができなかったり、言葉による説明が困難であると、現実を語るよりも「死にたい」という言葉に逃げてしまい、カウンセリングが発展しないこともある。三つの事例からは、自分の中にある「生の

エネルギー」に目が向くことで、これまで隠れていた本来の課題に目を向ける勇氣を持つことに繋がったと言うことができるであろう。

コラージュ療法には、コラージュ作品として視覚で自分の内面を見ることで、気づかなかつたり、これまで否認してきた感情を受け入れやすくするという効果がある。そこに「生」が現れていた時の学生の安堵とも言える表情を見てみると、このように「死」や「生」にまつわるテーマをコラージュ療法で適切に用いることは、生きる自信を持つてずいたり、自分を信じて何かにチャレンジすることを諦めていた学生が、そのエネルギーを元に直接的な行動に移す効果も期待できると推測できる。箱庭療法と違い、コラージュ療法は作品がそのまま手元に残るため、自分の心の動きを流れとして振り返ることが容易にできることも、学生の死への洞察を促進する効果になると言えるのではないだろうか。

文献

伊藤雅之(二〇〇七)「若者の死生観——日本人大学生が抱く死と死後のイメージ」、『愛知学院大学文学部紀要』37、九五—一〇〇頁。

藤井美和(二〇〇三)「大学生のもつ「死」のイメージ——テキストマイニングによる分析」、『関西学院大学社会学部紀要』95、一四五—一五五頁。

竹瀨香織(二〇一一)「大学生の生と死のとりえ方——学生相談室で出会う「死」とグリーンフカウンセリング、そして「生」へ」、『死別の悲しみを学ぶ』臨床死生学研究叢書3、聖学院大学出版会。

杉浦京子（一九九四）『カラージュ療法——基礎的研究と実際』、川島書店。
加藤孝正（二〇一〇）「死を訴える青少年とその描画——KFDを中心に」、『臨床描画研究』25、六一―九頁。